

## 編集者のことば

この雑誌も、本年度から4年目に入り、本誌が当初から数えて10号目となった。

都財政最近の状況からしてごく限られた予算の範囲内で、しかもしろうとが編集するものであるから、依然として不十分な点は多々あり、毎号気をつけたつもりでも小さいミスをあつとで知るといふこともある。しかし、幸いにして、センター研究員の方々が、この雑誌に研究成果を発表することに強い意欲と責任感を持っており、原稿不足で苦勞したことがない。そしてまた、これでも発表機関誌としては及第の点をつけて、改善を希望しながらも応援してくれている。学会方面でも、また東京都はじめ実務行政方面でも、本誌に対する注目と関心がひろがりつつあるように見える。それだけに、本誌の、内容を一層充実させ、体裁をさらに整えたいと思う。第4年目には、その方向をいくらかでも実行したいものと考えている。

センターの研究も、草創期の3年をへて、そろそろフシ目が目立ってきたのではなからうか。3つの大きなテーマが、あるいは深められ拡げられ、あるいは目標の山にかかりつぎへの展開を模索しはじめ、などという動きが出ているように思われる。本誌は、その動きを敏感に反映するとともに、これを客観化した形で当事者にフィード・バックすることに、役立てば幸いである。

本号の特集にも、その動きが感ぜられるのではなからうか。その内容と趣旨については巻頭論文がよく語ってくれているので、それを参照願うこととし、ここでは、これを促進するための応援を、読者と研究員の方々に願っておくことにしたい。